

# 平安～鎌倉初期の 和歌文学における藤詠

国語国文学専修 国文学コース  
文20-266 神代真実

# 1 和歌文学における藤

藤

- ・ 上代から歌題として広く詠まれた植物の一つ
- ・ 花期は晩春～初夏
- ・ 松や水などと同時に詠まれることが多い
- ・ 惜春の象徴として詠まれることもある

和歌文学において、藤がどのように詠まれる傾向にあるのかを調査する

## 2 先行研究

### 藤と松の取り合わせについて

松にかかる藤の花もその松にあやかって千歳の花となるとして、この藤と松の組み合わせは不動のものとなる。さらに中世に至ると、ますます一般化類型化し「藤松樹花」「紫藤懸松」などの歌題で繰り返し歌合や定数歌の世界に定着していったのである。（『歌ことば歌枕大辞典』田坂順子）

### 藤詠と白詩の関係について

平安人は、白楽天の過ぎ去る春に己れの人生を重ねる姿勢を受容したのである。（田中幹子「『古今集』における季の到来と辞去について——三月尽意識の展開」（『中古文学』創立三十周年記念臨時増刊号、一九九七・三））

白詩句を題にしながらも、白詩の特徴であった惜春の情に嘆老の情を重ねる表現はみられず、ただ過ぎ行く春を惜しむ気持ちを詠んでいる。古今集と同様、白詩からは、三月晦日に惜春の情を詠むという主題のみを享受したようで、日本漢詩の受容のあり方とは違いをみせている。（森本直子「古今集における漢文学の日本的受容——「弥生のつごもり」・「長月のつごもり」歌について——」（『学習院大学人文科学論集』十、二〇〇一・九））

### 3 調査手法

平安～鎌倉初期の和歌文学における藤詠の用例を収集し、分布図を作成

各和歌集における和歌の全体数と藤詠の全体数、注目すべき歌語や要素との取り合わせの数を集計

# 4 結果

万葉集と八代集の藤詠における取り合わせと表現の分布

	成立	松	永遠	水	ほととぎす	紫		惜春	全
万葉集	759～	0	0	7	8	0		0	23
古今集	905	0	0	1	1	0		0	4
後撰集	957～959	1	0	3	0	0		0	9
拾遺集	1005～ 1007	5	0	4	0	4		0	11
後拾遺集	1086	4	3	5	0	4		1	9
金葉集	1126	8	2	2	1	2		0	11
詞花集	1151	1	0	0	0	1		0	3
千載集	1188	2	1	2	0	1		0	4
新古今集	1205	1	2	2	0	1		1	7

## 平安～鎌倉初期の私家集の藤詠と取り合わせの分布（一部）

	和歌全体数	藤詠全体数	松	永遠	水	時鳥	惜春
小町集	1 1 2	1	0	0	0	0	0
在中将集	1 1 2	1	0	0	0	0	0
業平集	7 9	1	0	0	0	0	1
遍昭集	3 4	2	1	1	1	0	0
躬恒集	4 8 2	1 2	1	0	5	1	2
忠岑集	1 8 5	1	0	0	1	0	0
三条右大臣集	3 5	2	0	0	0	0	0
堤中納言集	1 0 6	3	0	0	0	0	0
伊勢集	4 8 3	3	1	1	1	0	0
敦忠集	1 4 5	2	2	1	0	0	0
貫之集	9 1 2	2 7	1 3	4	9	2	3 (4)
公忠集	5 3	1	0	0	0	0	1
増基法師集	1 2 2	1	0	0	0	0	0
中務集	2 5 3	8	4	0	6	0	2
頼基集	3 0	1	1	0	0	0	1
忠見集	1 9 6	5	2	0	2	0	0
安法法師集	1 1 4	2	0	0	0	0	0
信明集	1 4 4	1	0	0	0	0	0
元真集	3 3 6	6	4	4	2	0	1
朝忠集	6 0	1	0	1	0	0	0

# 5 考察

## 藤の永遠性について

- ・和歌文学において花は基本的に移ろうものとして描かれるが、藤に関しては松との同時詠において永遠性を表す景物としても機能することがある

- ・松の永遠性への言及を經由せずに、藤を永遠性のあるものとして詠じた歌も存在する



藤そのものに永遠性が見出されている点が重要なのではないか

## 藤の惜春詠と白詩の関わりについて

平安～鎌倉初期の和歌文学の藤の惜春詠において、藤と惜春を結びつけたという点で白詩の受容は重要な意味を持っており、春の擬人化という要素を取り入れた和歌も作られた。しかしその後の展開では、日本的な和歌の類型との融合により白詩的ではない惜春詠が多く詠まれるようになり、必ずしも「三月末日に春を惜しむ」という内容の歌に限らなくなった。藤の惜春詠において白詩の受容はきっかけに過ぎず、その後の「松にかかれる藤」詠や「水辺の藤」詠との融合から生まれた〈永続性〉の表現にも重きをおいて考えるべきであるといえる。



白詩を受容した当時は惜春と結び付けられ移ろうものとして描かれていた藤が、時代が下るにつれて松などの景物とともに永続性表すものとして描かれるようになった